

「被征服者」／「被征服民族」たちの声 ——岡本彌太・未刊詩集『山河』の可能性

佐藤元紀
千葉大学・教育学部

The Voices of “Conquered”:
The Possibility of *Sanga*, Unpublished Poetic Works of Yata Okamoto

SATO Motoki
Faculty of Education, Chiba University, Japan

昭和8年に創刊された公器的詩誌「日本詩壇」において、詩篇・随筆・詩論・時評などを掲載し続けた岡本彌太は、その中核をなす詩人の一人であった。詩作によって時代に対峙した彌太を、「汪盛な戦士」と平野威馬雄は昭和10年の「日本詩壇」で評している。戦後、詩誌「山河」創刊と詩碑建立を両軸として進められた岡本彌太顕彰事業は、文学者の戦争責任を背景に、第一詩集『瀧』を基調とした「青きあられの高士」という岡本彌太像を戦略的に構築し直した。それにより、戦前の「汪盛な戦士」という評価は後景化され、「日本詩壇」掲載詩篇を中心とする第二詩集『山河』が刊行に至らなかった理由も不透明にされてしまう。しかし、昭和10年頃の「日本詩壇」を紐解くと、同時代のアイヌ民族や満州国に眼を向け、国家によって「被征服者」とされた者たちの声を代弁する詩篇や随筆を発表し、それらを集成した詩集『山河』を企画する彌太の姿が明らかになる。

キーワード……日本近代詩 (Japanese Modern Poetry) ・十五年戦争 (Fifteen Years' War starting with the Manchurian Incident in 1931 and ending with the Japanese surrender in 1945) ・岡本彌太 (OKAMOTO Yata) ・「日本詩壇」 (*Le Monde Poétique Japonais*)

一、はじめに——昭和23年の岡本彌太顕彰事業の問題

昭和初期の詩壇の公器的性質を担った「詩神」^{註1}、「詩人時代」に次ぐ詩誌に、吉川則比古が編集を担当した「日本詩壇」がある。同誌創刊号の「編輯後記」(「日本詩壇」昭和8年4月)には、「実質的詩人のみの全面的活動機関たる、強力な、権威的詩誌」の刊行により、「実質あるものへの敬愛的襟度を包摂し、虚名虚質を排撃して、本質的詩壇を構成することを目指し、「全国販売の大量印刷を断行」する

ことが掲げられている。その創刊号に名を連ね、以降は「日本詩壇」を中心に活躍した詩人に岡本彌太^{註1}がいる。「岡本彌太がよき意味における地方詩人であったことは疑いのないところであろう」と池田克己(「前言」「山河」昭和23年10月)が評したように、高知という一地方に身を置きながらも、十五年戦争の展開に翻弄されて行く同時代に対峙しながら「日本詩壇」に詩篇を発表し続け、その中心的な役割を

連絡先著者：佐藤元紀 m.sato@chiba-u.jp

担った。しかし、現在では文学史の外縁に追いやられ、埋没した詩人の一人となっ
てしまっている。

その文学的営為としては、詩集『瀧』（昭和7年10月、詩原始社）までの詩篇と、
詩集『山河』（昭和11年春刊行予定であったが未刊）に収められる予定であった『瀧』
以降の詩篇とに大分することができる。^(注2)「日本詩壇」以外にも、「エクリバン」や「動
脈」、「二〇三高地」、「茉莉」などにも寄稿し、自叙伝「楚歌春秋——わが詩生活の
譜——」を鹿児島島の「詩道」（昭和12年3月、7月）に掲載するなど、各誌におい
て広範な活動を行っていた。当時の詞華集にも取り上げられ、吉野信夫編『現代日
本詩集』（昭和9年6月、現代書房）に「枯野日記」の一篇、小川十指秋編『現代日
本詩人選集』（昭和11年1月、動脈社）に「杜鵑集」、「落日（母の静物）」、「楽書
の人物」の三篇が掲載されている。

また、満州の詩人とも関係が深かった彌太は、同郷の島崎曙海『宣撫官詩集 地
貌』（昭和14年10月、二〇三高地詩社）、川島豊敏『北堡壘』（昭和15年11月、
二〇三高地詩社）の序文を執筆している。当時の状況について、「彌太と私と白牡
丹図碑」（『山河』昭和23年10月）にて島崎曙海は次のように振り返る。

私達（稿者注・曙海と川島豊敏）は満州から彌太に月に何本かの便りをかき、
土佐にかえると真先に彌太をたづねた。彌太の喜んでくれたことは勿論である。
彌太を満州によぼうと川島と計画したが終に実現しなかった。彌太の死んだの
は十七年の十二月だった。それより先、大連で彌太全集を出そうと、当時「女
性満州」を出していた田村和夫（服部晃次郎）と相談し、出すことに決定して、
土佐へその原稿送付方を申し送つたが、土佐から出すからとことわられたので、
沙汰止みとなった。

結果として、彌太の渡満や満州での詩集刊行は実現しなかったものの^(注3)、「二〇三
高地」から「満州詩人」へと活動を展開して行く昭和16年において、「満州詩人」
の中核をなす詩人のひとりとして島崎曙海が彌太を満州に招請しようとしていたこ
とは想像に難くない。

後年、島崎曙海の編集による「岡本彌太詩集」は、高村光太郎揮毫の詩碑「白牡
丹図」を彌太の郷里に建立（昭和23年7月）する基金集めのために刊行された『岡
本彌太選集』（昭和23年1月、岡本彌太選集刊行会）という形で実現する。時を同
じくして、「今後は岡本彌太の作品を主として掲載し、研究し、彌太の芸術を正当

に位置づけたい」（浜田知章「編輯後記」「山河」昭和23年3月）という宣言と共に
創刊された詩誌「山河」により、島崎曙海やその意を汲んだ浜田知章を中心として
岡本彌太顕彰の機運が高まりを見せた。

昭和23年という一年間に濃縮された同顕彰事業は、文学者の戦争責任問題とは無
関係ではいられず、^(注4)様々な思惑を交差させながら展開された。同年創刊の詩誌「山河」
が提示したのは、戦争に対して「ヒュメンな立場から、たえず批判的」な「人生派」
の詩人岡本彌太であった（浜田知章「編輯後記」「山河」昭和23年6月）。並行して、
「岡本彌太論」（『山河』昭和23年3月）、「彌太詩碑建設地整地作業」（『山河』昭和
23年7月）、「彌太と私と白牡丹図」（『山河』昭和23年10月）と、島崎曙海による彌
太に関する言説が「山河」に立て続けに掲載された。倉橋健一が指摘する彌太を担
ぎ出した「一夜つくりの村落型リベラリズム」を考慮したとき、^(注5)宣撫官として詩集
を刊行した島崎曙海の戦後の政治性をそこに垣間見ることができ

詩碑の建立と「山河」創刊によって急進的に進められてきた顕彰事業であったが、
「島崎曙海氏らによつて建立された詩碑「白牡丹図」で一応一つの段階を経た」と
いう浜田知章の宣言（編輯後記）「山河」昭和23年11月）により、「岡本彌太の詩
精神の究明から始まった「山河」の仕事」は半年足らずのうちに終止符が打たれて
しまう。その間、彌太の詩篇や詩論と共に友人や知己による回顧録は掲載されたも
の、戦後文脈において詩篇の内実を問う研究や批評までは展開されなかった。即
ち、「山河」誌上における岡本彌太顕彰は、当初計画されていた「彌太の芸術を正
当に位置づけたい」という目標よりも、文学者の戦争責任を後目に「一篇の戦争詩
もない」、「人生派と目される」^(注6)「ヒュメンな立場」の詩人岡本彌太というフレーム
を用意し、戦略的に用いることに目的があったと考えられる。

ここでの問題は、実作の検討から帰納的に確立されたとは言えない彌太の詩人イ
メージを用いることにより、その文学的営為が本来持ち合わせていたはずの批評
性が隠蔽されてしまったことにある。「あの「瀧」以後の展開を眺めずして彼の総
量を計ることはできない」と詩友であった間野捷魯（岡本彌太追憶）「山河」昭和
23年10月）が語るように、「日本詩壇」に掲載された十五年戦争期を同時代とする
詩篇を検討することなく、戦後の近代問い直しに伴うヒューマニズム確立の文脈に
「人生派」の詩人として岡本彌太を安易に接続するわけにはいかない。

そこで本稿では、昭和11年春に刊行予定となっていた未刊詩集『山河』の方向性

を照らし出した上で、編集作業を意識していた時期の「日本詩壇」に掲載された「青猪」を中心とする詩篇が何を相対化しようとする試みであったのかを問う。それにより、昭和23年の岡本彌太郎彰事業以降、見え難くされてきた彌太郎の文学的営為の同時代における意義を捉え直す契機としたい。

二、「被征服者」の「コタン雀」——未刊詩集『山河』の可能性

岡本彌太郎の生前に刊行された詩集は『瀧』一冊のみであるが、昭和11年の春には第二詩集『山河』（高知新聞社内山河刊行後援会）の刊行が予定されていた。「日本詩壇」（昭和11年3月）には、「風露露苦の裡に悠歩歩みを留めざる著者一家独自の至境ここに凝つて鬱然——劫遠山河流転の佛を成して洗滌萬色を泛ぶ」という触れ込みと共に、詩集『山河』の「陽春刊行」に向けた広告が掲載されている。翌月号の「日本詩壇」（昭和11年4月）にも『山河』の広告は掲載されており、日本詩壇発行所を取次所として「菊版壮重箱入美本／約百六十頁／頒価 一圓五十銭／三百部限定版」の予定で「予約申込」を受け付けている。

しかし、「予想してゐたよりもかなり多くの支持を得て刊行の準備にあつてゐたはずの『山河』は、「突然な生活事情の変転で右を延期するの止むなきに至り」（岡本彌太郎「詩集『山河』に関して」「日本詩壇」昭和11年9月）、終に未刊となつてしまふ。その理由について、島崎曙海は、「山河という詩集題が既に刊行されてあることを知り、彼はそれをこころよしとせず、終に山河は日の目をみなかつた」（『あとがき』『岡本彌太郎選集』）と述べている。一方、日中戦争開戦を目前にして、「劫遠山河流転の佛を成」す東洋詩の印象が色濃い詩集の刊行を彌太郎自身が危ぶんだことを「延期するの止むなき」の理由と捉える向きもある。

いずれにせよ、『山河』が未刊となつた理由は、右の「詩集『山河』に関して」に掲載された以上の情報が確認できていないため推測の域を出ない。また、詩集『山河』編集に関する彌太郎の意図を直接的に知る資料も確認できていない。しかし、詩集『山河』編集を計画していた時期の彌太郎の随筆「コタン雀」（『日本詩壇』昭和10年3月）には、『山河』を指すと考えられる詩集について次のような記述が見られる。

わたしはこれからちんぢんするわけのわからない憤怒の情の起つた時にはこのコタン雀のむきつけな泣き笑ひの姿を眺めようと思ふ。ちかく出さうと思ふ詩集は菊版にして純白の表紙に阿寒の山から吹き出す朱泥と金泥をあしらひそ

のしたへちよこんとこの暗褐の胡桃の雀を一羽添へようと夢想して、この寒い夕べを過してゐた。

『山河』を想起させる「ちかく出さうと思ふ詩集」の装丁として、内奥から噴出する感情を示すかのような「阿寒の山から吹き出す朱泥や金泥」と、「むきつけな泣き笑ひの姿」を湛える「コタン雀」を「純白の表紙」の上に配することが考えられていたことが分かる。

注目したいのは、「むきつけな愛嬌」を持つ「コタン雀」に「ちんぢんするわけのわからない憤怒の情」が接続されている点である。その「泣き笑ひの姿」に「憤怒」を透かし見るのは、「コタン雀」に同時代の「被征服者」たちの姿が重なるからに他ならない。

それにしてもこのコタン雀の全体の感じは北海の暗い土の香りを何千年も前からそのまゝ、素直に負つた被征服者の光栄の神光の深みを持つてゐる。それである、で良いのだ。

中央集権化を強めてゆく時代の波により、土地の「文化」が「押し流され」、いつの間にか「被征服者」の位置に置かれてしまつた「土着の人」や「空知や釧路の百姓」たちの姿が、「素朴な胡桃細工」の上に重ねられた時、「コタン雀」は「憤怒の情」の象徴となる。「そのまゝ、で良い」はずであつた「北海の暗い土の香り」と共に営まれてきた人々の生活様式は、外から流入する新しい様式によって強制的に変容されてしまふ。

このやうな悲しげな微笑にちかい玩具をもつて空知や釧路の百姓の子は遊んでゐるだらうか。／それとも洋刀や鉄兜のおもちやが熔岩の部落までどしどし流れこんでゐるだらうか。

「空知や釧路の百姓の子」が住む「熔岩の部落」へと大量生産された「洋刀や鉄兜のおもちや」が流れ込み、「農民の手工業」に拠る「コタン雀」の細工に取つて代わつてしまふことが危惧されている。侵略のための武器をモチーフとする「洋刀や鉄兜のおもちや」は、「土着の人」や「空知や釧路の百姓」たちが示すアイヌ民族に対して従来の生活様式の大きな変容を迫つた近代の北方政策による収奪を想起させる。

明治4年制定の「戸籍法」により、アイヌ民族を国民として取り込むと同時に、その文化や風習は抑制され、土地が奪われ、自由な狩猟も禁止された。また、明治

20年代には本州からの移住者が急増し、土地取得に伴う圧迫がアイヌ民族を貧困に追い込み、文化の破壊を招くことになる。貧困救済の政策として土地／医療／教育などの問題を明確化した「北海道旧土人保護法」が明治32年に制定されたが、アイヌ民族の農民化促進とアイヌ小学校設立による同化政策強化にこそその本質があった。昭和6年に白老のアイヌ集落を訪れた荻原井泉水は、「アイヌ部落」(『春秋草紙』昭和9年11月、岩波書店)にてアイヌ小学校の様子を次のように記している。

私達は先づアイヌの児童ばかりを收容してあるといふ白老第二小学校に校長山本儀三郎氏を訪ねた。日曜日なので、生徒は居ずに、「犬ハ走ル」などと書いた清書に朱の丸がついて(成程、これは好く書けてある)黒いボールに貼ってあるがらんとした教室を、氏は先づ見せてくれた。

アイヌ小学校として整備された「白老第二小学校」の教室には、児童が「犬ハ走ル」などと書いた清書に朱の丸がついて「いる手習いが掲示されており、アイヌ語を日本語へ、アイヌ風俗を日本文化へと矯正する皇民化教育の一端が映し出されている。

そしてアイヌ村落での案内役を務めた小学校の校長が、「もとの酋長の家」に上がり込んで「アイヌの主人をさしおいて、私達に其爐べりに坐れと云」い、主人に「熊祭りの儀式を一つ、して見せて上げてください」と指示するように、学校の外にまで強い影響力を持ち得た存在として描かれていることには留意せねばならない。榎森進「第九章 北海道旧土人保護法とアイヌ解放運動」(『アイヌ民族の歴史』平成27年2月、草風館)に拠れば、「アイヌの児童のみならず、校区の成人アイヌの教育の場としても積極的に活用され」、「アイヌ全体にたいする同化教育・皇民化教育の拠点という役割をも果たさせられていった」のがアイヌ小学校であった。この校長に顕著なように、アイヌ小学校を介して、アイヌ民族の生活の場の内側へと和人社会への同化と天皇制国家への忠誠の意識が浸み込んでいたのである。

井泉水が『春秋草紙』を上梓した昭和9年には「旭川市旧土人保護地処分法」が制定されている。「北海道旧土人保護法」により、和人に対して払い下げられた耕作適地から外れた土地がアイヌに分配されることとなったものの、旭川のアイヌにはその分配が行われなかった。「旭川市旧土人保護地処分法」交付に至るアイヌ民族の運動は、バチエラーが企画した全道アイヌ青年大会(昭和6年8月)を契機に、土地返還運動としての性質と「北海道旧土人保護法」改正・撤廃を掲げる差別反対

運動の性質とが重なり合い、国会に対して「アイヌ青年から保護法の体系的な改正要求が提起される事態が生じ」という大きなうねりを生み出していた(瀧澤正「第12章 アイヌ民族と戦時体制」関口明・田端宏・桑原真人・瀧澤正編『アイヌ民族の歴史』平成27年8月、山川出版社)。

こうした深刻な状況に陥っていたアイヌ民族による差別的撤廃と生活の確立が表面化しつつあった状況を踏まえると、岡本彌太「コタン雀」における「洋刀や鉄兜のおもちや」が「コタン雀」に取って代わる構造は、「被征服者」たちに対する国策による圧迫を示していると読むことができる。「被征服者」たちによる運動が展開されていた同時代を背景として、詩集『山河』は企画され、北海道の雪の大地に「コタン雀」を添えた装丁が「夢想」されていたのである。

以上のように、昭和10年の初頭に「日本詩壇」において発表された随筆「コタン雀」には、「阿寒帯の針葉樹林の吹雪に吹かれてちりちりに」されながら、外部からの圧力や暴力によってアイデンティティを奪われ続けてきた「被征服者」としてのアイヌ民族の姿を透かし見ることができると同時に、同時代において、「神秘的な涙にちかひものをその姿態に堪へ」続ける「コタン雀」は、近代日本国家に翻弄されて「被征服者」の位置に置かれてしまった者たちの姿を喚起するアイコンであったと言える。それを表紙に据える装丁は、厳しい地域環境に身を置き、国家や時代の暴力にも晒されながら、二本の頼りない細い足で立ち上がり、抗い始めた「被征服者」たちの側に立った詩篇の集成として詩集『山河』が企画されていたことを意味すると考えられる。^(注10)

それでは、「被征服者」の象徴を配する詩集『山河』を「夢想」していた頃の詩篇は、どのような傾向を示していたのであろうか。随筆「コタン雀」が掲載された前月号の「日本詩壇」(昭和10年2月)に発表された詩篇「野猪」を確認してみたい。

三、「青い野猪」の「牙」——詩篇「野猪」

岡本彌太の詩篇「野猪」は、「★」で区切られた六つの節から構成されている。同郷詩人の住江明は、「岡本彌太論(承前)〈瀧〉以後の史的展開」(『日本詩壇』昭和14年4月)にて「野猪」について次のように言及している。

作品「野猪」を見よ。氏は自らの胸に青い野猪を養ひ、傲然と自己への道を歌ふ。新しき生命の道を、苦患にしはかれず、なほ〈野猪〉の如き生を念ずる。

ここにあるものは感傷でも誇張でもない。分裂感情の妖乱を統率した真率なる告白である。

住江は岡本彌太個人の問題として「(野猪)の如き生」を捉えているが、本稿では詩篇「野猪」第六節に見られる「われら」の問題として「(野猪)の如き生」が意味するものを考えてみたい。詩篇第六節を引用する。

われらそのゆくところの草のしたにあらしめ

われらこそ欠けたる焔日

われらこそ天地背離の大輪廻

われらはたゞ雪崩れる われらはたゞ^{ママ}虻^{ママ}行^{ママ}する

われらは不毛の曠野をそびらにひきわれらはいつも青い野猪を胸に養ふてゐる暗い周囲を照らす「焔日」(＝朝日)に自らを重ねる「われら」にとって、日の光が届かない「草の下」を歩んで行くことは厭うべきことではない。また、「天地背離」した中間に存在する「不毛の曠野」のような迷いの多い世界を、「雪崩れる」勢いを以って、爪を立てて這うように力強く「われら」は進んで行くという。恐れを知らずに猛進する野生の「青い野猪」のように、環境に飼いならされることなく、屈せず抗いながら前進し続けようとする「われら」の意思を「野猪」第六節には読み取ることができる。

第六節において「われら」の意思を表明し、「青い野猪」として再び立ち上がったのは、「うれひ」を帯びた歴史を背負って歩むことを受け入れ、終焉へと向かいつつあった共同体内の社会意識を変容する必要を自覚したことに起因する。「野猪」第一節では、外界から隔絶された地に身を置くうちに、自らを守り、他に抗うための「白い牙」が「欠け」てしまった「われ」の姿が歌われている。

われは

盲たる土偶の生れ

われの馬耳をうつものは雪と化鳥の裂帛と

大古^{ママ}の落木の非情の旋律と

われはかゝる辺陲^{ママ}をたのしみ

かゝる清奇の嗚咽のなかに自らの土糞の壁を塗つた

われは野伏から野伏の胸の間を軒昂とあるいた

われは霏々たるさながらの自由無上の雪白の紛乱だ

この茫と溷れたる涯をながれる暗い朱い原質だ

われはたゞ一つの欠けた白い牙をもつてゐる

「雪」によって閉ざされた「辺陲」に身を置く「われ」は、外界から隔絶されて生きてきたことにより、「盲たる土偶」／「馬耳」ゆえに外の世界のことを見聞きすることができない存在として描かれている。「化鳥」の悲しい鳴き声と「大古の落木」がそよぐ「旋律」ばかりが耳を打つ世界——純粹な「清奇の嗚咽」のようにプリミティブな世界——のなかで、時に「雪白の紛乱」として、時に地下の「暗い朱い原質」として、山野を自由に意気昂揚と歩き渡ることを「われ」は「たのしみ」としてきた。しかし、その世界の内側に脆い「土糞の壁」を築いて外界との接触を断つうちに、抗うための武器である「白い牙」はいつの間にか「欠け」てしまい、「牙」の役割さえも忘れられた状況に陥ってしまったことが第一節では示される。

第二節になると、「われら」の「土糞の壁」に空いた穴から、「焔日」が差し込み、新しい「青雪」が漏れ入るようになり、状況に変化が訪れる。

石獸に似た隣人の壁からのぞく焔日

われらにもう一枚の葩がない

われらの土糞の壁からは屢々青雪が洩れる

雪櫃が素走る

われらはさうして天のやうに轟々たる快哉を知る

(謀反に謀反をもて蓋はれる銅青の恒久 われら
かゝるところの泥雪にうち罵られおのれの白歯を成した)

「壁」の穴を通じて「雪櫃が素走る」「壁」の外の世界に初めて触れた「われら」は「天のやうに轟々たる快哉を知る」こととなる。そこで、「壁」の外の世界との接触を試みるものの、外界から「うち罵られ」、拒まれる裏切りのような「謀反」を「恒久」に受け続けてしまう。その結果、「おのれの白歯を成」す程に奥歯を噛みしめた苦渋を長年に渡って積み重ねてきた歴史を「われら」は背負うこととなる。

また、第一節で「われ」であった主格が、第二節で「われら」という一人称複数の主格へと変化することにより、「一つの欠けた白い牙」は「われ」という個人の問題ではなく、「われら」という共同体全体の問題へと拡大されている。以降、共

同体全体が抗うことを忘れ、現状を改めることもできないままに生きてきた「われら」の歴史が問題とされて行く。

第三節も「われら」を主格としながら、「壁」の外の世界との接触を断ってきた共同体の現状が歌われる。

われらは竹柏にちかき子を生し

われら、雪と、金泥の烈火と、欠けたる牙とより知らない

われらはいつも薙露を歌ひ

われらはわれらの枯れたる金泥の残円に従ふ

「雪」のなか「烈火」を吹き上げる「金泥」とは、地中から泥を噴き上げ続ける泥火山を指す。^(注12) 四行目に「われらの枯れたる金泥」とあるように、「金泥」は実景としてだけではなく、「われら」の内面から沸き起こる怒りの象徴としても用いられている。しかし、その「金泥」は、円形の泥跡を留めて既に「枯れ」果ててしまい、今では新たに湧出することもない。即ち、第三節の「われら」が示すのは、状況に抗うこともなく、「薙露」（＝挽歌）を歌いながら終焉へと向かうしかない共同体の姿に他ならない。「雪と、金泥の烈火」の世界から身動きが取れないまま、「欠けたる牙」に疑念を抱くこともなく生きてきた「われら」の歴史は、「竹柏」に宿るという金剛童子のように神聖で無邪気な「子」へも自ずと引き継がれ、背負わせて行くことになる。

第四節は、「子よ」という呼びかけから始まる。しかし、その呼びかけと共に語られるのは、共同体の歴史を負って「光なきその闇目を閑々とあるいて」辿ることしかできなかった「われ」の姿である。

子よ

火花となつてちつてある

この一餐の夕べの重い閑けさを

そなたらの雪の行方にわけてある

うれひは暁に暮にそなたらの檻樓のそびら

万年の山のいろにある

われはたゞかゝる雪の薫を負ひ光なきその闇目を閑々とあるいてきた

「一餐の夕べ」の場に、「檻樓のそびら」の上に、「万年の山のいろ」の中に「子」自らが「重い閑けさ」を纏った歴史を感じ取っているように、親から子へと共同体内の「うれひ」の連鎖は途絶えることなく続いて行く。

共同体の歴史を負う「われ」に対して、第五節では、土地と歴史に個人を縛り付けようとする場から「朱をひいて」関わりを断ち、自ら「壁」の外へと出て行った「彼奴」等が登場し、限界を露呈した共同体の存続が危うくなって行く。

彼奴も彼奴も

すでに朱をひいてある

金泥の火は夙くに雪のそこになつた

外の世界に順応して生きるということとは、「彼奴」のように「おのれの白歯を成した」怒りやその痕跡といった共同体の歴史を「雪のそこ」へと隠して生きることが意味する。そして、「彼奴」等のような存在が増えることにより、共同体はやがて忘却されて失われてしまうこととなる。故に、「うれひ」を帯びた歴史を押し付けてきた「土糞の壁」の外の世界に抗うための「白い牙」を取り戻し、若々しく猛進する「青い野猪を胸に養う」ことが第六節にて求められたのである。

しかし、第六節にて「われら」が「白い牙」で抗つてみせたのは、「土糞の壁」の外側の世界だけではない。「欠けた白い牙をもつ」ことに無自覚になっていた「われら」という共同体そのものや、「光なきその闇目」を歩む者としての自己を受け入れ続けてきた歴史が問い直されている点は看過ならない。自らを「焔日」として規定し直し、滅びゆく共同体に光を取り戻すことにより、共同体の新しい道を果敢に切り拓こうとする態度の表明こそが「青い野猪を胸に養ふ」という「われら」にわたっての「野猪」の如き生（住江明）だったと読むことができる。詩集『山河』の構想期に当たる昭和10年初頭の「日本詩壇」に掲載された詩篇「野猪」が示すのは、既存の共同体を問い直し、歴史を相対化することにより、その刷新を試みようとする「われら」の姿であった。

前節で確認したように、詩集『山河』は、「被征服者」を象徴する「コタン雀」を配することにより、時代や社会の「被征服者」たちを取り巻く状況に眼差しを向ける詩集としての可能性を内包している。「雪」や「金泥」が示す北方の土地を舞台とし、旧来の共同体内の意識変容を歌った「野猪」は、「近き将来に於て湮滅に帰する危機^(注13)」に直面していた同時代のアイヌ民族の状況を読者に想起させる。また、

「青い野猪」として共同体内の意識を改め、立ち上がろうとする「われら」の姿は、「北海道旧土人保護法」に由来する土地所有権と差別の問題を国会に対して陳述し、「アイヌ土人保護政策上に新紀元を齎す」と謳われた（滅び行く人達へ安住の地を与ふ）「読売新聞」昭和9年1月10日朝刊）「旭川市旧土人保護地処分法」交付に臨むアイヌ民族の姿とも響き合う。

このように、詩集編集や詩篇によって昭和10年頃の岡本彌太が焦点を当てようと試みたのは、現状に甘んじて時代の敗残者として生きる人々ではなく、「被征服者」であることに抗うべく立ち上がろうとする人々の姿であった。まさに「風露露苦の裡に悠乎歩みを留めざる」（『山河』広告）「日本詩壇」前掲）者たちの声を留める詩集の基調を成す一篇として、詩篇「野猪」は「日本詩壇」に発表されたのである。

四、おわりに——渡満する「コタン雀」

深い「雪」に閉ざされた世界を舞台とする詩篇「野猪」に顕著なように、「日本詩壇」に発表された彌太の詩篇が冬に関する景物を多く扱う理由について、山川久三は、「おのれの深重の罪科を問い続け、人生の峻厳を追求するリゴリスチックの性向」（「あとがき——解説に代へて——」『岡本彌太詩集——山河篇——』平成10年1月、泰樹社）に起因すると推測する。しかし、明確な意図を持って歌われた詩篇において、冬の景物を歌った理由が彌太の「リゴリスチックの性向」にだけあるとは考え難い。そこで、自らの詩篇が「冬を欲する」理由について言及した彌太の「詩作の実際（アンケートその一）」（『日本詩壇』昭和13年2月）に注目してみたい。

私のこころの底をうごかすパトスは、私の住む明るい南の国であらうが、私のあらはさうとするものは全然反対の傾向をもつてゐる。／このためにも、私はわがふるさとの国に住むのが適してゐると、今のところ思つてゐない。然しいつかは私も心からなる南の国の詩を書き得る生活を——時代を欲してゐることは云ふまでもない。／私が、秋を、冬を欲するのは、必ずしも詩人特有な魂からではない。もつといへば私の裡の南の国はヒマラヤのやうな雪を帯びてゐる。右の回答からは、「こころの底をうごかすパトス」を直截に表出する詩を許容しない「時代」や「生活」における圧迫が「ヒマラヤのやうな雪」として形象化し、心象風景としての「南の国」を「冬」へと上書きしてしまう状況と向き合ったところに当時の彌太にとっての詩作の源泉があったと考えられる。ならば、詩篇「野猪」

における「雪と化鳥の裂帛と／大古の落木の非情の旋律と」に深く閉ざされた「辺陲」の景はアイヌ民族だけの問題ではなく、「われら」を縛り付ける共同体における「生活」や「被征服者」としての生を突きつける「時代」の形象として捉えられ、「雪崩れ」て「虻行」しながらも「青い野猪」のように「雪」の中を突き進む姿は、「生活」や「時代」の暴力性に対する抵抗として捉えることもできよう。

「生活」の場における旧弊が個人の自由を奪うことに対する抵抗は、詩篇「沙」（日本詩壇）昭和10年7月）にも変奏されている。

花がまつ白く空気がひき裂くやうに青くつてこの滅んでゆく村落はいい
沙と思へばどこでも光れる

もうどこへも帰らん

石のしたには魚がうごうぞしてゐるしお金なんどなくとも菜つ葉などでどうにか暮れる

砂や唾の真似で暮すよりこの歳になるとさつぱり内臓のなかで物を言ひたい
どこにもある沙のなかに堂々と頭を突つこんでゆきたい

おれにはこの石つ垣のこわれた滅ぶ村落が、きりきりのところへぶちあたつて
さつぱりとする。

一所に留まらない「沙」に自らを擬え、「どこにもある沙のなかに堂々と頭を突つこんでゆき」、「もうどこへも帰らん」と宣言することにより、これまで自由を奪ってきた「村落」に「おれ」は訣別する。それは「村落」の「石つ垣」の内側の習俗に「砂や唾の真似」をして盲目的になつて「暮す」ことから解放され、「内臓のなか」に留めてきた自らの意思に従つて生きて行くことを意味する。故に、「村落」という共同体の内と外とを別つ「石つ垣」が崩壊し、旧弊を押し付けてきた共同体が滅んでゆく様を、その外側から澄明清冽な景物と同じように「さつぱり」とした気持ちで主体は眺め遣る。「石つ垣」の綻びから共同体の外側へと目を向け、新たな自己を求めて「もうどこへも帰らん」と主張する主体の姿は、古い枠組みを改め、新たな生き方を確立して行く「われら」を歌った詩篇「野猪」に通じるものがある。

詩篇「沙」について、詩人として進むべき方向性を見据えた当時の彌太の心境を反映していると捉えた岡野捷魯は、「このごろの彼の心境がくつきりしてゐる」（「一つの感想——岡本彌太に関して——」『日本詩壇』昭和11年1月）と述べ、安部宙之介も「氏の詠嘆が単なる詠嘆ではなく、又単なる主我的でもなく、諦観でも寂寞

でもない」(岡本彌太論)「詩・研究第三冊」昭和11年推定^(注4)と評している。「このごろの彼の心境」を詩篇「沙」に間野が看取したように、昭和10年前後の彌太の著作には、「被征服者」として個人を縛り付ける既存の枠組みの解体と新たな自己の確立が繰り返し表れていると言える。

第二節で確認した「被征服者」の象徴である「コタン雀」が当時の彌太にとって重要なアイコンであったことを示すかのように、昭和10年10月から11月(推定)にかけて「高知新聞」紙上で連載された「随筆 楚歌春秋」^(注5)にも「コタン雀」(昭和10年10月24日)と題された随筆が発表されている。「随筆 楚歌春秋」版「コタン雀」は、「日本詩壇」版「コタン雀」と内容面で重なるところが多いものの、表現と内容を改めた一編として執筆されている。大きな変更点として、詩集装丁に関する記述が削除され、「藤棚のある画家^(注6)のうちの黒檀の机の上に中秋の光を受けて立つてゐる」「コタン雀」の後日譚が追記されている。「随筆 楚歌春秋」版の一部を引用する。

恰度冬だつたし自分は吹雪の落葉樹林をちりぢりに吹かれて散つてゆく寒雀の 一羽を机の上に置いてその動かうとしない疲れのあとをみた。阿寒の山に吹きあげる朱泥のいろや、毒のために鼻のかけたコタンコルクルや内地人の子を孕んだその娘らの生活を——コタン雀のどこかにその吹雪の闇があり被征服民族の哀求の律が神韻とたたへてゐるやうに思つた。

「毒のために鼻のかけたコタンコルクルや内地人の子を孕んだその娘らの生活」に焦点を合わせ、同化政策によって風俗や文化、習慣を奪われ「純粹なのはゐない」上に、「型ばかりのもの」にされてしまったアイヌ民族の姿が「日本詩壇」版と同様に胡桃細工の「コタン雀」に重ね見られている。「日本詩壇」版の「被征服者」という表現を換言した「被征服民族」は、ここでも直接的にはアイヌ民族に向けられている。しかし、「日本詩壇」版の約半年後に発表された「随筆 楚歌春秋」版に見られる「被征服民族」という言葉は、「満州国」皇帝・愛新覺羅溥儀の訪日に沸く同時代状況において、「日本詩壇」版とは異なる響きを伴って新聞読者に響いたのではかろうか。

昭和10年4月以降の同時代の人々の興味は、昭和9年3月に「満州国」皇帝即位を慶祝した秩父宮訪満への答礼として、昭和天皇の招待に応じて国賓として訪日した愛新覺羅溥儀に向けられていた。同年4月6日に東京駅にて溥儀を異例の形で出迎えた昭和天皇とそれを奉迎する人々の様子を「皇紀の青史を飾る忘れ難きこの日

よ!」(「青史に輝く日よ! 両国元首、この御交歓 東京駅頭感激の極!」「読売新聞」昭和10年4月7日夕刊)と新聞は報道する。また、赤坂離宮で催された溥儀主催の皇族を迎えた晩餐会や、靖国神社・明治神宮参拝の模様、その後の京都・大阪・奈良・神戸・宮島などの訪問が連日のように新聞やラジオ等のメディアで報道され、国を挙げての祝賀ムードが創出された。それにより、「有ラウル守国ノ遠図、経邦ノ長策ハ常ニ日本帝国ト協力同心以テ永固ヲ期スヘシ」とした「満州国皇帝ノ即位詔書」(「満洲事変満五年」昭和11年9月、陸軍省)が示す両者の「協力同心」が演出されたのである。こうした祝賀ムードがコードとして機能することにより、「被征服民族」という認識から「満州国」は切断されて映り、「五族協和」を旗印とする満州開拓によって本来の土地を奪われた現地の人々の姿も後景化して行く。

そのような中、「コタン雀」を題材として再度執筆された「随筆 楚歌春秋」版「コタン雀」は、白熱する報道の裏側に目を遣りながら、国策として進められた開拓が招いたアイヌ民族の現状に「満州国」の現実を透かし見ることに、「被征服民族」の側に置かれた「満州国」を正視しようとしないう同時代に対する批評として機能するようになる。故に「随筆 楚歌春秋」版「コタン雀」は、「日本詩壇」版の単なる焼き直しではなく、日中戦争開戦を目前に控えた時期にあつて、「被征服民族」として「満州国」を縛り付ける枠組みを祝賀によって隠蔽しようとする同時代の風潮を相対化し、その実相へと目を向ける必要を迫った随筆と言える。それを溥儀訪日に沸く同時代状況を創出する一翼を担った新聞というメディアで行っていることは看過できない。

一方で、陸軍内部での統制派と皇道派との対立、それをきっかけに勃発した二・二六事件と報道規制、軍部大臣現役武官制の復活など、昭和10年前後の日本は征服する側の論理を強めて行く情勢にあつた。そうした状況下において、詩集『山河』が未刊に終わったのは、「山河」という詩集題は別にあるのを知つたので、気をくさらし止めてしまつた」と島崎曙海「岡本彌太のことなど」(「日本未来派」昭和23年1月)が述べるような個人の心情に拠るとは考え難い。「被征服者」／「被征服民族」の側から既存の枠組みの転換を訴える詩篇を集成する可能性を秘めた詩集『山河』は、征服する側の圧力が高まってゆく同時代において未刊に終わらざるを得なかつたと考えるのが妥当ではなからうか。

本稿で扱った詩篇だけで早計に断定することは避けねばならないが、既存の枠組

みからの転換を「日本詩壇」誌上で主張し、「被征服者」を象徴する「コタン雀」を掲げる第二詩集『山河』の刊行を企図していたように、昭和10年前後の彌太の文学的営為は同時代に対する抵抗を明確に示すものであった。故に、「此の詩人が置かるべき詩界での地位は隠者のそれではなく、旺盛な戦士の定座である」と平野威馬雄「青き叢」の高士岡本彌太韻府考（前掲）は彌太を評したのである。

第一節で触れたように、「人生派」の詩人として戦後に彌太を再生させるプロジェクトとして、詩誌「山河」創刊と『岡本彌太選集』刊行、詩碑建立による昭和23年の岡本彌太顕彰事業が戦略的に実施された。そのなかで「人生派」や「青きあられの高士」という言葉で換骨奪胎されながら構築された戦後の岡本彌太のイメージと「旺盛な戦士」と評された彌太の同時代の評価やその詩篇の内実とは大きく異なる。都合よく捨象されてしまった岡本彌太の文学的営為が持ち得た批評性は今後も継続して究明して行く必要がある。

【注】

(1) 岡本彌太の経歴等に関しては、『岡本彌太詩集——山河篇——』（平成10年1月、泰樹社）所収の「岡本彌太年譜」に詳しい。なお、本論では原則として「彌太」と表記し、初出に「弥太」と表記されているものはママとした。

(2) 詩集『漧』以降の詩篇とは、「日本詩壇」を主たる媒体として発表された詩篇を指す。一部「詩神」（昭和6年1、2、4、6月）に掲載された詩篇、同人誌掲載詩篇を含む。

(3) 「そして是非大陸に渡る事を考へて頂きたい。私はあなたが愈々田舎人となり気力さへ弱つてゆくのを考へると、非常に淋しい感にうたれる」と彌太に渡満を勧める島崎曙海の書簡（昭和16年4月21日）や、「私は唯、岡本彌太詩集を刊行したいと考へてゐるだけです。どなたの手で刊行されても結構なわけです」と彌太の詩集刊行に関して触れた島崎曙海の書簡（昭和16年3月2日）を「岡本彌太宛書簡」（香南市教育委員会蔵）にて確認することができる。

(4) 浜田知章（編集後記）「山河」昭和23年11月）は、「島崎氏のことに関してとやかく云つた一部の人を除いて、真に詩を理解する人に於てのみ島崎氏の精神を理解し、彌太の詩精神に通ずるのである」と言及しており、『宣撫官詩集 地貌』や『十億一体』（昭和17年4月、女性満州社）を刊行した島崎曙海

の戦争責任問題が背景にあったことが窺われる。

(5) 倉橋健一「今、思うこと——「山河」復刻版をめぐる（三）」（イリプスInd）平成28年10月）は、「いわゆる民主主義文学陣営からの文学者の責任追及弾劾」を目的に当たりして、「弥太詩碑建立の裏にある地方文壇形成に右往左往している人びとのおもわくが、どことなく透けてみえてくる気がする。岡本彌太はようするに担ぎ出されているにすぎない」と言及する。

(6) 岡本彌太を「人生派」と評した同時代評に、平野威馬雄「青き叢」の高士岡本彌太韻府考（『日本詩壇』昭和10年6月）がある。岡崎清一郎を「サバトの修辞家」としたことに比して、岡本彌太を「スタムプールの人生派」と捉えている。浜田知章が「人生派と目される」と述べたことはこの同時代評に拠るものと考えられる。また、島崎曙海（岡本彌太論）「山河」昭和23年4月）の「なにか彌太は青とか、光とかそういうものに象徴されそうである。青きあられの高士岡本彌太」という評も平野の評の影響を受けたものと考えられる。しかし、「人生派」や「高士」ではなく、「旺盛な戦士」として彌太を位置付けることにこそ平野の狙いはあった。

(7) 例えば、島崎曙海「宣撫官詩集 地貌」の「詩集地貌の序」において、「詩人でなければならぬ仕事がある。とても奴等では出来ないことを純粹にやつて生きぬいてみるのだ」と宣撫官として戦争の道具としての詩を書くのではなく、詩人として「純粹」に詩を書く必要を説き、「宣撫の余暇に詩を書け」と彌太は訴えている。

(8) 倉橋健一「今、思うこと——「山河」復刻版をめぐる（三）」（イリプスInd）前掲）は、猪野陸の同様の意見に首肯した上で「そのとおり、みずから刊行を見合わせたものと思つてよいだろう」と述べる。

(9) この「コタン雀」は、「フキリツップを愛する私の若い友人からの新年の贈物」と記されている。「高知新聞」で彌太が連載した「随筆 楚歌春秋」（昭和10年10月～11月推定）（↓注15）の「コタン雀」（『高知新聞』昭和10年10月24日）の記述には、「石狩野の江別町のフキリツップを愛する若い詩人小田君から贈られたコタン雀」とあることから、「日本詩壇」にも参加していた詩人の小田邦雄から贈られたものと考えられる。

(10) 萩原朔太郎は「装幀の意義」（『新しき欲情』大正11年4月、アルス）において、

「内容の思想を感覚上の趣味によつて象徴し、色や、影や、気分や、紙質やの趣き深き暗示により、彼の敏感の読者にまで直接「思想の情感」を直覚させるであらうところの装幀」に「決していつも冷淡であることができない」と言及している。

(11) 「虬行」では意味が通らないため、「爬」の誤植と考えられる。『岡本彌太詩集——山河篇——』（前掲）も「爬行」に改めている。

(12) 「コタン雀」でも「阿寒の山から吹き出す朱泥と金泥」という記述が見られ、阿寒湖畔の泥火山から吹き出す粘土は「朱泥と金泥」と表現されている。

(13) 浅野研眞「アイヌ部落に原始宗教を探る（一）」（『読売新聞』昭和10年8月24日朝刊）の他にも、「失はれゆく文字無き北方のアイヌ文化」の保護（「アイヌの哀歌 亡びゆく前に録音」「朝日新聞」昭和10年9月28日朝刊）が訴えられる等、アイヌ民族は滅び行く民族として同時代に認識されていた。

(14) 奥付、表紙等に発行日は記載されていないが、昭和11年1月に小川十指秋の編集により刊行された『現代日本詩人選集』（動脈社）について、安部宙之介が「現代日本詩人選集について」という推賞文を寄せていることから、昭和11年以降の刊行と推定した。また、「詩・研究」は、安部宙之介が詩・研究発行所（島根県）から刊行していた詩誌であり、同第三冊には岡本彌太「琴歌四種——感想にかへて——」として、「うすぶとん」、「ふゆの月」、「火の車」、「東野」が掲載されている。

(15) 「随筆 楚歌春秋」は、その存在は認められながらも、当時の「高知新聞」の紙面が散逸していることから、本文を長らく確認することができない資料であった。今回、猪野睦旧蔵の複写物にて本文を確認することができた。なお、「コタン雀」全文については、同時代の文学に関して言及している「随筆 楚歌春秋」の他の掲載回と共に、翻刻と注釈を施し、別稿を用意する。

(16) 挿絵を担当している藤田太郎宅を指すと考えられる。なお、藤田は彌太の第一詩集『瀧』の装丁を担当した同郷の画家であり、後に国画会会員となった。

【謝辞】

・本稿は、科学研究費助成事業・若手研究「十五年戦争期の公器「日本詩壇」に見

られる地方詩人の文学的営為に関する調査及び研究」（研究課題番号：20K12943）研究代表者・佐藤元紀）による研究成果の一部である。

・本稿執筆にあたり、故猪野睦氏、藤田泰子氏、岡本龍太氏、高知県立文学館・川島禎子氏・福富陽子氏、香南市教育委員会、香南市文化財センター、その他多くの方々より資料提供のご協力やご助言を賜ったことに感謝の意を表したい。